

で選んだことがあったが、この欄で選んだのははじめてである。下旬がいい。自撮りの歌であるのに、主役を菜の花にしたアイディア。

腕時計を現地時間に合わせおり合わせつづけて二十八年
クリシユナ智子

作者名がないと分からないし、作者を知らないと分からない一首。こういう短歌も、近・現代短歌ではあり、になつてゐる。たとえば正岡子規の「瓶にさす藤の花ぶさ短ければたみの上にとどかざりけり」がそうだ。子規の名前がないとしたら、そして、この時期の子規が寝たきりだということを知らなければ、この歌は意味が分からない。掲出歌、作者を知つていれば、「現地時間」とは、日本以外の国の時刻だということが分かり、作者の感慨も読める。

辞めゆきし同僚のこと語れども覚えてゐる者一人も
居らず
高橋秀

さり気なく存在の軽さを表現しつつ、読後、寂しさの波紋が広がる感じがする。職場の問題だけではない。人間関係が淡く希薄になつてゐる現代日本の社会をうたつてゐるようだ。

少しづつ東へ移動しつつある陽だまりという猫の乗り物
武藤義哉

下旬「陽だまりという猫の乗り物」という見立てがすべて一首。なるほどなあ、と感心した。意外性が読者を楽しませてくれる。

妻癒えて師走も末の墓参り桜はずでに春の芽吹きぞ

松田浩二

人生の味わいを楽しみとやわらかくうたつていて注目した。歳末の歌なのだが、俗世間とは無縁な、夫婦二人の世界と自然だけをうたつてゐる点が独特である。

白梅が春の日射しに微笑んで退職辞令今日手渡さる
中根猛

長年にわたつた仕事を退職するに当たつての、作者にとつては大切な記念の作。一連に四十二年勤めたという作があった。長く在外生活を送つた作者。だからこそ、記念の作にあえて白梅という日本的な花を選んだのだろうと読んだ。

真つ先に焼香をして火葬場に釘を押せる長男のわれ
長嶺元久

母上の死に取材した一連中の一首。この一首は、情的な表現はいっさい用いないようにしている。あくまでもたんたんと行為のみを描写して、抑制の味わいを読ませる。クラシックな男の美学である。

愛想なき文面文字を見ておればアンニュイな貌浮か
び来るなり
黒岩剛仁

男女の別れの余韻をうたう。第二句は、「文面文字」なのか「文面」「文字」なので、読みがちがつてくるように思う、私は後者と読んで、メール、ワープロ文字の時代に、手書きの手紙をもらったのである。とすると、アンニュイな貌を連想させるような文面、そして文字、ということになる。